

## 山岳部報

雑誌名	龍南
巻	2 0 1
ページ	1 2 0 - 1 3 0
発行年	1927-03-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8946">http://hdl.handle.net/2298/8946</a>

柔道部	〃	四〇〇、四五
野球部	〃	九三七、九四
庭球部	〃	八〇七、三〇
端艇部	〃	五二四、六〇
水泳部	〃	二五四、八二
山岳部	〃	二三三、九五
陸上競技部	〃	六一七、六〇
蹴球部	〃	二八七、六五
合 計		一一二五〇、〇〇
I 總會計所屬		
基本積立金		一七五、〇〇
端艇建造積立金		五〇〇、〇〇
各部遠征補助費	二一五四、八五	
片道汽車賃、宿泊料	二人一宿	
至二、五	辨當代一人一回	至三、五
端艇用ローラー代		一〇〇、〇〇
會計事務取扱費		六五、〇〇
石灰代		五〇、〇〇
テニスコート修繕費		二〇〇、〇〇
豫備金		二一六、二三
各部運動場修繕積立金		二〇〇、〇〇
合 計		三六六一、〇八
II 無所屬會計所屬		

運動會及ビ斷郊競走	六〇〇、〇〇
ボートレース	五五〇、〇〇
舊委員贈呈記念品	五〇、〇〇
對七高戰審判費	一五〇、〇〇
雜 費	一五〇、〇〇
合 計	一五〇〇、〇〇

## 山 岳 部 報

### 山岳部第二班

### 日本アルプス槍烏帽子縦走

班員 理三乙 田淵 稻藏

相賀 勇一

理二乙 保野 正之

「夏でも寒い木曾の御嶽さん」を中央線のあのトンネルにすつかり弱らされた眼で車窓からチラツト見た時の胸の高鳴り！それからの一週間私達には見るもの、聞くもの総てが天國のそれでした。據尻で以前學校の体操科に居られた西村先生と一緒にになりました。さすがに松本は山の都です。リュックと汗じみた上衣と焼けた顔と、それで

も誇らしい眼差の山の人達の都です。松本から島々へはまあこんな山の中に！と思はれる立派な電車があります。約四十分間、白い長い雪の溪を抱いた山々が走馬燈の様に移つて行きました。島々は清水屋に泊りました。島々はい、所ですれ。紋部をはいて「アイアイ。アリマスライナ」てな調子です。どうしても御維新以前ですれ。

七月十九日。起きて見たら雨ちやありませんか。昨日迄はあんなに上天氣が續いたのに！一高や學習院の連中があんなに大成功で下りて來てたのに！併し登ることになりました。所がもの、半里も行くといふ雲が切れて晴れさうです。すつかり喜んでトロの道を川に沿ふて行きました。大分山らしくなりました。この邊でなんと秀綱の奥方が山を越へて逃げる途中心ない樵夫にやられた事があるそうです。それで村には癪病が絶えないとか。それを名所にしておく氣心は一す判斷に苦しみます。又降り出しました。酷留で休みました。東高工の生徒が一人で烏帽子から槍を越へて來てゐ

ました「今年は雪が多い。殊に蓮華の雪溪は危険ですね。槍も可也です」微かな不安を覺ながらも喜んだのを否定しません。夏の雪といふのがアルプスの初心者にはわけもなく嬉しかったのです。登り下り二里の徳本峠はきつい坂です。殊にその日は大風大雨でして、頂上の茶屋でふるへながら熱いコーヒを啜りました。アルプスだけにしやれてゐます。地爐の傍で晝食をとりました。平常ならここからの穂高觀望はすばらしいものですが、雲ですつかり駄目。たゞ案内人が頂上はあの位といつて示す角度にそんなに高いんですかとびつくりしただけでした。一時半峠を下りました。電光石火の立派な道ですが下りは登りの方より急の様です。雨で靴がすべつて困りました。上高地は日本アルプスのオアシスです。明神、六方、穂高の骨ばかりの岩に雨上りの雲がかすめ、それを飽迄も澄んだ洋川が寫し、所々にかげられた橋、それがあの白樺の丸太ではありませんか！はんのき、つが、もみ、その間に處女のような含羞

みを見せて白樺があられもなくその白い肌をさらしてゐます。明神池を訪れました。池は明神嶽の麓にあります。水は雪溪から流れる雪ですもの。岩魚が島の影に點々してゐます。島といふと大げさですが一尺平方位の島なんです。自然の妙に驚かれます池の傍には有名な嘉門治の小屋があります今は亡き主の面影がしのべれます。この邊はキャンプの指定地だそうです。早大や三高の連中が居ました。私達は四時五千尺旅館の前の吊橋を渡つて上高地温泉の渡水屋へ着きました。折角晴れかけた雨が急に又ひどくやつて來ました。失望はしましたけれども詩の様な雰圍氣にゆつくりひたられるといふ喜びがありました。で明日は温泉滞在といふ事にして一湯浴びてすつかりアルプス人になりました。それでもやはり未練ですね。洋川のせゝらぎが氣になつて仕方がありませんでした。

七月二十日。駄目です。降つてゐました宿の人もこんな雲の斷續が一番悪いといひました。併し八時頃から段々小降りになつ

て晴れそうです。やつぱり槍といふ事になりました。あはただし旅です。それでも幸運でした。雲は私達の行く道を次第に逃げて行きました。雨を追ふて進んだのです。洋川は上るにつれて愈々その美を増します。碧色にすんだ水が真白い巖をかんでゐます。すくひ上げて飲むその一杯が神水でなくて何でせう。絶えず川を左にして道は次第に登ります。めづらしくはありましたが少々氣味の悪かつたのは丸木橋です。皮をはいてるものですから靴がつるつるすべるのです。下は高い崖でしやう。保野さんがすつかり参つたものです、だけど平つたいのよりやはり丸い方が如何にも山らしいと思います。十二時半一の俣小屋に着いて晝食をとりました。常念瀧はその前にあります。又ロツククライシングにいゝ場所があるそうです。この邊から自然はそろそろその残酷な美を見せてゐます。二時半槍澤小屋跡に着きました。これから一里殺生小屋まで雪溪です。小犬の様に雪をふみしめました。小雪溪を越して愈々大雪溪にか

かりました。丁度降りて来た人に様子を聞きました。普通の金剛杖にたいの靴といふいでたちの私達にそれでは危いといふのです。自分達はカンシキまでつけて下りたが此通り負傷したといふのです。それでも仕方はありません。三四郎式で約四十度の急峻な雪溪を一步一步登りました。すばらしい坂です。田淵さんが一寸すべつて杖を落したらすべる／＼真白く光つた雪の上を！思はずづつとしました。特に大槍小屋の下四五町の坂つたらないのです。やはりカンシキかピツケル位あつたらし／＼思ひました。まあ無茶な熊襲だと案内人は思つた事でしやう。元氣で登りつめました。殺生小屋へ着いたのは四時半です。天氣は良くなりそうです。槍の頭が雲間に陰顯します。殺生小屋は六間に三間位の小屋です。それにその夜泊つた者が百三十人！船の三等所ではありません。人間の雑詰です。外では風が強く壁を吹きつけます。その風が幸ひでした。槍の雲がその爲すつかりとれました。蒼白い夜、その天を摩す槍こそ！

私は大宇宙を念ずる哲人と思ひました。少くともその瞬間だけ私は俗愚の世の利害を追ふ人達がなまけなく思はれました。

七月二十一日。すつかり晴れてゐます。

槍の頂上からは心適く迄乾坤の大觀を縦にする事ができました。北の方水平線の彼方に富士が見えます。裾野の長い白山、雪で包まれた立山、白馬なつかしい山々が遠く近く見えます。一旦槍の肩へ引返してそれから急坂とすべり落ちる石と間を縫ふ匍匐松の間を下りました。十時過ぎ双六池小屋に着きました。期待した御花島はすつかり雪の下で駄目。それでも兎とスキーと……と番人の十八番はいつ迄も涯がありません。熱いお茶で辨當を食ひ食ひました。やつと一時頃小屋を出て双六の頂上をすぐ傍に見ながら雪溪をよちて蓮華へかりました。聞いてた通りでした。蓮華の幅廣い谷が全く雪の原です。い／＼真白い崖です。やはり私達は茶目の方が勝つてゐたのです。やう。わざ／＼その長い深い急な谷をすべつたのです。杖で重心をとりながら。それ

から後は雪溪が何んだといふ恐ろしい自信がついてしまひました。けれども大きい雪溪はこれで終りなのです。振り返り／＼帽子をふつて別れました。三時蓮華と鷺羽の中間の鞍部に着きました。槍が東南に見えます。可也の小屋がありますが、わざ／＼その夜はキャンブにしました。西瓜月がかゝつてゐました。篝火をたきながら今日まで、今日からを語りました。二八〇〇米の高所での雑談！尊いものでした。眠らうとしましたが駄目です。雪溪がすぐ傍です。寒くて／＼。一時頃から又起きて火をたきました。

七月二十二日。曉が段々覺めて來ました雲海！大觀です。神の褥に違ひありません。五時半キャンブを引拂つて出發しました。約十五町は雪溪です。登りつめると向ふに黒部川が長く流れ、薬師嶽が高く聳てゐます。薬師はい／＼山だそうです。日本海と全アルプスを一束して見られるさうです。鷺羽から水晶あたりは九州にある様な山です。殊に私は久住を思ひました。それから

赤嶽です。赤はぼろ／＼した險岩でして、併し皆は何か知ら追はれる様な氣持ちで急ぎました。眞砂へかゝつたら突風です。吹き飛ばされさうです。やつと頂上の吉田小屋跡へ着いて休みました。五郎嶽は巨石がごろ／＼してゐます。それに海草の様な蘚がくつついてゐます。まるで海岸の様です。私達はその上を飛ぶ様に走りました。三つ嶽を越すと烏帽子が見えました。烏帽子は遠くから見たら一サアルプスのベニスといった形ですね。風がなぎました。すつかり落ちついてもう終へた積りなんです。なごり惜しいなんていつてゐました。十一時烏帽子の小屋に着きました。晝食をとつて早速烏帽子嶽に向ひました。白いざらざらした花崗岩の砂をしまつめた道にはこれ又可憐の駒草がな／＼した姿を見せてゐます。烏帽子は美しい岩です。この邊一帶公園にしてもそのまゝ、でいゝといふ様な美しさです。今夜はこの小屋泊りの筈でしたが余り早いので濁の急坂を下りる事にしました。たつた一里です。それが登るに一日、下る

に三時間、これだけで如何にその難路かが想像されませう。併し間には御山櫻が咲き誇つてゐました。この邊では丁度四月の氣候です。又高瀬川に沿ふた發電所が見えます。村が見えます。西村先生はやたらに「里心がついた」の連發です。下りつめてほつとしました。よくまあ怪我がなくつてよかつたと思ひます。濁小屋からはトロに乗れると楽しんでゐましたが、今日は休み。全くがつかりました。約二里葛温泉まで高瀬川に沿ふて重い足を引きずりました。高瀬川は男らしい川です。水量の大きいそれでもよく澄んだ川です。發電所がいくつも出来るそうですが無茶をせればいゝと思つてゐます。發電所は工事中のもありました。所謂監獄部屋なんですよ。バクチ打つ者もあり、寝ころぶ者もあり、こき使はれてゐる者もあります。大部分が鮮人らしいのですが、仕事を求めて遙々支海を越した彼等がこゝした悲惨な有様に投げやられる。民族は強くありたいものです。五時半温泉に着きました。と雨です。やはり私達

は惠まれてゐました。雨後の濁の坂、考へただけでもいやになります。その夜は心快く祝杯を挙げました。

七月二十三日。發電所工事用の電車に便乗して貰つて大町へ向ひました。すぐ電車で松本へ行つて中央線へ乗込みました。

(相賀記)

## 第五班 石槌面河

班員 谷 基 吉

宮川 本夫

私は生を伊豫に享け、而かも四年間松山に住みながら、石槌を極め面河オモツの幽谷美を探れるの機会を與へられなかつた。之を遺憾に思つて矢先宮川君と全縣の關係から話は早くも纏つて此處に石槌登山面河探勝の機会を惠まれたのである。

道は普通登山道小松、横河原からとらないで久萬から登る事にした。七月廿二日午前六時松山を出發。朝風を胸一杯に吸ひ込んで、左に薄紫の大山塊石槌連峯を眺めながら我々は山懷に吸ひ込まれて行く。久萬

から仕七川道を通り竹谷に向ふ。ほとゝぎすしきりに鳴くが道が平凡であつた爲瀧漕橋から全速力。岩谷寺を参拜してクルスノ峠に懸る。日光の直射と反射に苦しめられて熱苦しい事夥しい。と見れば赤い山百合と黄色なキレンゲシヨウマが入亂れて將に御花畑の觀を呈してゐる。峠を面河畔に下つてから大味川、五味、一朽原・相木を経るひぐらしの淋しい音、くどすぎるホト、ギス、柔らかな感じのうぐひすの聲等聞きながら面河川を上る。かくして若山の押岡旅館本店に着いた。

宮川君と二人で足や体を洗ひに川へ下りる。素晴らしく澄み切つて、冷い。夕方主人の勧める儘に湯に入る。窓外を見れば今し月が出る處。いゝなあと一人言を言ふ。詩人なら勿論二句も三句も出やう。丁度四年前北アルプス烏帽子岳の麓で友人九名と焚火を圍み車座となつてコーヒーをすゝりながら眺めたあの月と全じ形だ。而してその晩、月を觀て踊り狂つた事等が思ひ起されて全くいゝ氣持になつた。流れの音に和

してかじかが鳴く。湯上りの爽かな氣分は上高地の夜と又好一對である。今宵一夜此のふるひつきたい幽谷美と又甘酒に酔はん哉である。

翌二十日は午前六時四十分に取りかたが今日は面河見物と云ふのでゆる／＼仕度。宿より半時間ばかりの處で面河第一等の景關門に差懸る。澄切つた水が結晶片岩の切り立つた間を深みを作つて流れて行く。その岩の奇、水の美に何人も賞讃の聲を惜しまぬであらう。

之から川を溯つて御來光瀑に至る面河河畔と鐵砲川の谿谷とは普通人の嘆賞する面河勝景なのである。關門から内の景は水底の岩石が白く明るみを帯びて来る爲に一層の美しさを水に與へてゐる。九時十分龜腹旅館に着く。

十時から櫃ノ底に向ふ。此の旅館より一山西に越して鐵砲川に出ると巨大なる岩石に取り圍まれて宛も櫃ノ底と言ふ感じのする櫃の底へ出るのである。之より川に沿うて上ると軍艦石、鐵砲石、木葉石、御月岩

鐵岩、兜岩、布引瀧、第二軍艦岩を又櫃の底から下流には丸淵、雄淵、雌淵等を次から次へ見る事が出来る。一旦宿へ引き歸したが雨がぼつ／＼川の面に紋を畫き初めたそれでも金山谷までは行く決心で蓬來溪、紅葉河原、霧泊瀧を見て川の右岸を溯る。

雨は相變らず降つて平素姿を見せない名物の魚鮠が浮かれ出して川面に今を盛りと得意のダンスを入亂れて踊る。布引の瀧、獅子頭、浮龜岩、瀧十郎が飛び込んだと云ふ彌十の瀧、(今は虎ヶ瀧と云ふ)更に昨年巖谷小波の名付けしと云ふ雄熊淵(水深三十五尺)雌熊淵、久孝、久武の瀧等更に名勝は盡きない。若し此の水と岩と森林の美景を探れんとする人があれば紅葉時を御奨めする。而して名物の魚鮠を食ひ損つてはいけない、私達は乾したのも煮たのも焼いたのも勿論生にも舌鼓を打つた。遠慮は損である、亭主に言へば喜んで食膳に出す。

翌廿三日は三時四十分起床。五時半宿を出る。雨は止まない。薄暗い森のトンネルを右に折れ左に折れて第三休憩所着。雨は

小止みとなり西北にエンマ峯、二ノ森、堂々森の山々が東に又筒上山が霧にその頂きを包まれて時々思ひ出した様に笑顔を霧の上に出して見せる。之からまばらになつた木が次第にその數を減じて熊笹ばかりの山となる。緑の中に笹百合が一輪又一輪我々の足元で歡迎の辭を述べる。松山高校の生徒が二人リエツクをチヨナンと背中に載つけて下駄をカラコロ漣面を作つて行くのに會ふ。その元氣賣するに足る。二ノ森に至る尾根と分れ道の頃から雨は勢を増し頂上は全く白雲に没して終つた。幾らか不平の氣持で八時五拾五分三ノ鎖の下へ來た。此處でアメ湯を乾す事六杯。山男の申す事には今日は天狗岳へは絶對登れぬと云ふ。石槌の頂上は一九二一米突で天狗岳は一九八一米突四國の最高峯である。山の形から云つても興味は更に後者にあり、私は實は之に登りたい爲にやつて來たのである。が風雨と霧。山男の注意等、我々は天狗岳を次の機會に譲るの余儀なきに至つた。頂上も此の風ではとの話であつたが之だけは腹

の虫が治らずバイナツブルに舌鼓を打つて鎖を一つ一つ握りしめ頂上に達した。新しい石祠の前に釘づけにされた様な二人の信者が動きもしないで盛に祈りを捧げてゐるあたり信仰の山特有の情緒でもあらう。頂上はかなり廣い地面を持つてゐて、何百人でも一杯になるし五十人でも一杯になると云ふ話が成程と頷ける。ソヅキがあるが大和アルプスのそれに較べてはるかに小規模なものである。此の夏祭に三人の死傷者を出した三ノ鎖の登り口と下り口には鎖を登るべし側を通るべからずと書いてある。即ち此の慘事が側を通つた人が落した石で鎖を登る信者を墜落せしめた爲、惹起したものでかゝる悲惨事を未然に防がうとの注意である。

二ノ鎖一ノ鎖を経て四十丁石槌神社に下る。雨と風は相變らず強くすぶ／＼になつた道を眞白な水兵服の姿勇ましく二十名程の女學生が三人の教師に引率されて登つて行くのに會ふ。此の天氣ではと思はれたがその元氣に先づ呆氣にとられた。此の連中

は高松の女學生でシャン揃ひ。そいろに意を強うするものがある。神社前の小舎で火にあたりにながら晝食。一時廿分發。山を北へ下るにつれ雨は次第に止み北方瀬戸内海がパノラマの様にそのあつさりした美しい色彩を展開する。それが次第と目映いばかりのくつきりした美しさに變じて行く。雨あがりの景色は又棄て難いものである。願ると石槌はもとのどす黒い雨雲に包まれて物凄く容子を呈してゐる。二人は逃げる様にとん／＼山を下つて行つた。道路に出たのが三時。一休みした後北へ四里の新道を一氣に歩き通す。我々の足で二時間半馬車はあるがすつと遅いものと心得ればならぬ小松の汽車に遅れてはとウオーキング氣取りで二時間と拾五分。北條行の汽車は夕陽を浴びて靜かに動き初めた。(谷)

## 日本アルプス燕槍縱走記

谷 基 吉

本年こそは立山をと力んでた甲斐もなく同行者の家庭に不幸があつたのと財布の都

合上で豫定を變更し、燕槍を縦走する事になつた。

八月七日午前〇時新宿發、拾壹時半松本に着き物品購入の後有明に向つた。中房温泉まで四里だから晝から出掛けて丁度いい行程である。二時有明發。有明温泉を過ぎてから少々大馬力近道を登つて信濃坂を東に暮れかゝる有明山を後に中房温泉に着く時に六時。宿には電氣。ラヂオ、プールと云つた様な設備があつて多數の部屋を持つてゐる。階下から有明の小學生數拾名が可愛い、聲を張り上げて歌つてゐる。離れには東京の高女生が林間學校を作つて今し將來の良妻賢母たらんとして御料理の眞最中「明日の御天氣は今夜のラヂオで」と宿の主人が云ふ。此の處俗化の形であるが「アルプスで眺めの良いのが燕岳より草八千草咲く中に遊ぶ雷鳥面白く雲の切れ間に槍を見る」と山男が歌ふ如く北アルプス第一の展望台なる燕岳を一般の人に紹介する點に於て又今年の様に女學生連中がどしどし登山する様になつて見れば是非ない事でもある

何は兎もあれ俗化の不平よりも私は全志の登山者が數を増して行く事に喜びを禁じ得ない。

明くる八日は四時起床。そろ／＼出發の連中もある。五時四十五分發。すが／＼しい朝の空氣に浸りながら山路にかゝる。燕への行半ばにして昨夜燕の小屋へ泊つたらしい女學生四五名が勇敢に下りて来る。世に言ふ大根足の女で泥まみれの草履を穿いて下る様は滑稽ではあるが勇敢絶比である富士見の松を過ぐる頃北アルプスの靈峰が一步を上る毎に一步づゝその姿をぐい／＼展開してすつかり晴れ渡つた青空に雪の袴を穿いた槍が全時に圓い頭をつき出した大天井と共に我等の心を捕へる。誰だか槍の事を地上から天上を威嚇してゐる唯一の大膽者と言つたが私には又なく懐しい戀人の様な氣がして可愛いくて仕方がないのである。大天の左に常念が現はれ槍の右に笠ヶ岳。而して槍の彼方に我等を威壓する穂高が一塊をなしてゐる。眺めを恣にしたが燕の小舎に達した。小じんまりとした立派

な小舎で此處にもラヂオの設備があり名古屋放送の山の天候を知る事が出来る。九時頂上を極めバイナツアルの罐詰をまた／＼間に平げる。全く素晴らしい此處の眺めは！槍から烏帽子へかけての尾根續きの美しさは。而して今年の雪の多い事は。登つて面白いと思つた烏帽子も此處から見れば餘りに貧弱である。その後から薄紫の立山が繪畫的に遠くうづくまつてゐる。東南には富士が聳ゐてゐる。赤嶽が低く前面の谷へ向けて赤い岩の流れを落してゐる。槍が穂高を背負つて小槍を抱きかゝへてゐる恰好等燕岳は全く美しく又眺めよき山の名を汚さぬものである。小舎に歸つて晝食をとる八月を少し過ぎる爲か槍に向ふ人數は極めて稀である。蛙岩爲右衛門吊岩を過ぐる頃さしも一點の曇りもなき北アルプスに遙か槍ヶ嶽の頂上あたりから雲を生じ初め東北に向つてそれが次第に大きく幾分か疑はしい形勢となる。大天井へ差懸る頃には小さい粒を降らし初めた。土方風の男がカンバスを胸にかけ強力四人に背一杯の荷物を背



眞はせて、てつくりとやつて来る。此の男こそ妻君を連れてよく上高地等を訪れると云ふ有名な吉田畫伯である事が解つた風烈しい大天井も何なく過ぎて雪溪を一つ二つ横切る頃難を従れた親鳥の雷鳥が先に立つて道案内をする。人を恐れない爲に拾年も前にはよく人に捕へられた雷鳥も今は保護鳥の名、人の心に浸みて自由な翼を雲間に廣げ或は留松の間を縫ひながら登山者の眼を慰めて呉れるのである。親鳥はヒョーンと飛び歩く雛鳥の後になり先になつて子供の子守をする。その可憐な事石を投げて殺す等毛頭起りもせぬ。ふとした拍子に彼等は谷間へ向けて下りて行つた。幾らか風を混じへた雨が次第に大粒となり西岳の小舎へ着いた時には益々非道くなり殺生小屋まで一里半の道も此天候ではと沈没に決定。時に三時四拾分。小舎は天幕張で如何にも質素ではあるがかなりの收容力を持つてゐる。疲勞の爲か毛布を頭から被つて横たはつてゐる男一人の他誰も居ぬからひつそり閑としてゐる。併し風雨は益々加はり物

凄味を帯び空元氣を出して殺生小舎まで行かうものなら飛んだ難儀に遭遇する處だつた。しばらくして三人五人とびしよぬれの連中が此の小舎へ避難して來た。全じく槍を極めんとする連中で急に明るい空氣が漲つて來た。一人の女性を加へた都合拾貳人の登山客に依つてやがて温かい夕飯のテールが圍まれる。次の炊事部屋に元氣らしい黒々とした松本高校の生徒がゐた。此の人は夏休みを利用して殺生と常念と此の西岳の小屋をかけ持つて登山案内をやつてゐる人だそうでも何でも昨日は穂高を案内して拾圓稼いだと云つて喜んでゐた。夏休みの仕事としては一寸いゝ趣向である。雨の夕は早くも暮れて就寢時間が迫つて来る。小舎の男つか／＼と進み出で思ひ／＼に寢轉んでる客に向つて「山岳動物は此の線に列ぶべし」と聲高らかに叫ぶので一同どつと大笑ひ。パタ／＼とあふる天幕。急に打ちつける雨。物凄風音等に今にも枕元の石垣が壊れ落ちそうである初めの中はなか／＼寝きれない。「おい、ウイスキーを呉れ給へ」

と云ふ小聲が各處に起る。山男は五分とたぬ内にこうこうと肝をかく。蚤に食はれたかばり／＼かく連中もありそれが幾分か神經的に傳染してなか／＼寝れない。かくして不安の一夜が過ぎて行つた。

九日。寝むさを辛棒して薄暗い天幕からはひ出て見る。風と雨は前夜と全じくすつかり明け切つてゐる筈の空も山も總ては霧に隠されて今日を不安ならしめる。雨の小止みを見計つて殺生小舎へ行く決心を固めたが後の連中は残らず豫定を變更して一ノ俣へ下り今日上高地へ泊ると云ふ弱腰。將して雨は小止みとなつたので多少の心細さを心棒して八時出發。時々雨は止んでも風と霧は絶えず惱ます事を忘れぬ。西岳の小舎を谷間に思ひ切り下つた處から愈々槍の大山塊にとりかゝる。尾根の一本道を頼りに槍の肩を目がけてどん／＼登る。霧の爲めに少しの眺望も許されないが濃霧と云ふ程度のものでなく危険性は少い。登つては少し下り登つては少し下りして拾壹時半目指す殺生小舎に着く事が出來た。冷えた体を

風荒き表から小舎の中に入り込んだ時には矢張り無事到着の言ひ知れぬ喜びがあつた小舎では雨を避けてゐる者参拾名ばかり薄暗い部屋に蠢いてゐる。爐を圍んで温いコーヒーをすゝり晝の御馳走には槍ライス一名御山ライスカレーと云ふ奴が出る。美味い事皆頼も抜けよとばかりしやぶりつく。退屈しのぎに晝は歌の講習が初まる。私とKOの男が慶應山岳部の歌を擔任。隅の方に寝てゐる男まで教へて呉れ教へて呉れで紙と鉛筆と喉が大騒動。その他六根清淨、山の鴨綠江、安曇節等の歌が次から次へ皆を浮き立たせる。夕飯が濟み暗黒の世界が訪れる頃一つのガスライトがあかゝと幾本かの蠟燭と共に登山者の面を照らし初めた。茶が欲しくなつたので爐の處へやつて行くといふ茶だよとコップを呉れる老好爺がある。飲んで見れば酒。今晩は木曾踊をやるんだと氣焔當るべからず。植物を採集に來た中學の先生で豐饒たるものの一つ。木曾なら俺あらめよとほろ酔ひの先生もある。やがて木曾踊の時が来る。人夫も客

も一つ處で音頭よろしく痛快に踊り狂つた十日。雨と風が靜まつた氣配に御來迎が拜めるかも知れぬ心算で三時四拾分小舎を出る。霧は未だ大地を匍ひその中を一列になつて登り初める。槍の肩へ來た時には大分明るく、私を驚かしめたのは其處の小舎で何時の間に作つたのかと聞くと八月一日に造つたばかりであつた。五日頃店を開いたそうでストーブの設備があり温いが風が強いから寢れぬ由。それから愈槍の岩壁にかゝる。霧の爲に眺望はゼロ。祠に第二回登山記念の名刺を入れる。一緒に小舎を出た人々が全部頂上へ上り切つた頃部厚い霧の一部が薄れてあれよと云ふ間もあらせず東に當つて一瞬ほんの一瞬眞紅の焰を畫いて見せた。歡聲急に起つて人々の顔には言ひ知れぬ喜びの色が漂つた。それが急速度に消えて茫然とする。霧は一成の速度を以て活動してはゐるもの、なかゝの事に去りそうな形勢もない。恨みを深く霧に残して下る。肩の小舎へ下り着いた時霧がとれて一枚板の岩、小槍の姿を眼前に見た。

嬉しさの餘り小舎の後の丘に飛び上つて見ると重つたるい霧の下から太陽の恵みを受けた雨あがりのさつぱりした谷間が心地よげに覗いてゐる。赤嶽の裾が見え、終ひには笠さへ顔を出して見せた。尾根を少し下つた處に北穂高登山口の石標がある。朝飯を小舎ですまし記念撮影の後雪溪を下り初める。汗みごろになつて一步一步登つて來る人達を流眄しながら痛快に滑べり落ちる。後方には槍が一點の雲さへなく微笑んで居る。少々癪に障つたが思ひ諦めて一ノ俣へ下る。梓川が廣い帯をなして幾多の美景を造りつゝ澄み切つた水を流してゐる。右に穂高左に蝶ヶ嶽、長崩山を見て幅廣くなつて行く梓川の森林地帯を南に下る。白樺の根元に放された牛、川を流る馬の群等畜生とは云ひ全く幸福そうだ。明神池を見て上高地の五千尺旅館に着たのが三時半。梓川の左岸をぶらゝ田代池大正池見物に出かける。左に俄然聳てゐるのは六百山霞澤嶽で前方には焼岳の昨年爆發した名残の煙にあかゝと夕陽が逆光線を與へてゐる

何と云つても雪簾の流れを模様づけてる穂高は斷然之等羊茅景の上に超然としてゐる。田代池は寫真で見ると全く美しい池でその畔にキャンブする若い男達が羨しい位だった。歸には先に泊つた事のある清水屋を訪れたが昔の面影はなからで變つてゐた。十一日。溫度五十二度。散歩がてらに清水屋の方へ行く。朝風をうけて真にすがすがしい。朝日に眞白く浮き出た白樺の林が穂高や六百山さては焼岳の煙をバツクに持つてゐるだけ一層シヤン然として油繪の題材を無盡蔵に作つてゐる。拾時拾五分宿に御別れして徳本峠にかゝる。今日で山を下つて終ふつてんでラストヘビーの形なかゝ元氣がいゝ。峠の茶屋で晝食をとる。話に聞けば徳本に隧道を作つて自動車が高高地に入る様になると云ふ。せめて上高地だけは自然の儘に我々に残してゐて欲しい金持がいくら浸入して來てもびくとしないが何處かの避暑地の様に矢鱈無鱈に別荘でも作られてはたまつたものではない。上高地の勝景だけはあの徳本を汗水流してやつて

來たものにのみに與へられた樂園であつて欲しい。近頃此處を國立公園にするとの聲が高くなつたから無茶な事は出来ぬと思ふがそれにしても神河内の名を汚さぬものであつて欲しい。近來上高地のキャンブは素嗜しく盛になつて來た。此の時でもK.O、明治、早稻田、學習院その他國民新聞の一隊等非常な繁盛を呈し六十餘組にも達してとの事であつた。晝食をすまずとトントン下りで歸留まで四千八百米を五十分で下つた。此處より三里半の長つたらしいトロ道な之も又二時間でやつつける。途中極樂水、長命水等の甘露には一々ありつく。かくして六時三分島々發の電車で松本に向ふ暮れ行くアルプスの山肌が美しく彩られて去りゆく者に哀傷の感を抱かしめた。

## 温泉巡り

理三乙 藤田 拓  
理三乙 谷 基 吉

第一日 内ノ牧驛—内ノ牧温泉—外輪山—宮原—半土瀧—霧通瀧—杖立温泉泊。

第二日 北里村—奴留湯—峽湯—湧蓋山—赤瀧湯—筋湯泊。

第三日 寒地獄—法華院泊(雨)

第四日 大船山に登る筈の處雨にて中止  
久住町—宮地町解散。費用五圓。

高岳烏帽子岳 文三 金子 明末  
理三 谷 基 吉

理一 宮川 本夫  
文一 村上 忠

第一日 宮地—日尾峠—高岳—中岳—湯谷温泉泊。

第二日 千里濱—烏帽子—地獄—垂玉—立野驛解散。

## 霧島櫻島方面

理三 谷 基 吉  
理一 宮川 本夫

第一日 加久藤驛—白鳥温泉—御池—韓國嶽(硫黄採取場より濃霧強風の爲め登山不可能であつた。餘儀なく次のコースを)—蝦野湯—大浪池—榮尾湯—硫黄谷温泉泊。

第二日 湯之野温泉—高千穂峰—天逆鉾

—硫黄谷温泉へ返し牧園まで自動車(一圓)

—鹿兒島泊。

第三日 袴腰(櫻島)にて熔岩見學—武—

御岳頂上—鹿兒島—熊本解散。

## 端艇部報

終、有明兩俱樂部が止むなく廢されてから、星霜既に三たび江津の小天地から解放されて長江の水に我々が初めてオールを浮べた時フオアのボートからシツクスのボートに移つた時我々には來るべき將來に對する強い憧憬と燃ゆる希望とがあつた來るべき夏こそ中央の檣舞台に全國品等專門學校の猛者を向ふに廻して思ふ存分「熊襲の兒」の腕を見せてやるかと思ふと我々の若い血潮はいやが上にも燃ゆる立つた然し乍ら我々がこの光榮ある歴史の第一歩を踏み出さうとした時悲しくも一つの大きな事實の前に驚かればならなかつた。

我々が新艇を用ゐて去る年の春晚く綠水

に於ける第一回の漕艇大會をあの組選の形式で行つた時我々は果してあの大會から何を得たか嘗ては江津の湖に我々の先輩が血

と涙、苦楚と忍従の尊ひ犠牲によつて初めて勝ち得たあの榮光ある優勝旗を當時の優勝クルーは果して、どの程度の感激と誇りとを以て受取り得たか、今年の第二回大會に於ても全く同様であるがこの最後の榮ある(？)優勝戦に於て私は薄暮の河岸に一般觀衆はいはすもが不幸にして四、五人の五高生を見出すことは出來なかつた、舊よりこの形式のレースに於て昔に等しき熱と力とを要求することは余りにも無理な注文かも知れない、けれどもかくの如くして勝利に狂ふクルー果してそこにどれだけの感激があるう、敗辱に泣くクルー果してそこにいくばくの哀愁があるう。

世紀の過渡に立ち生活の歧路に迷ふ近代人がともすれば妥協と安逸に陥り易いことは決して想像に難くないけれども僅か兩三年の間にして而も同じ龍南の森を訪れる若人が殆ど一様に(敢て總てとは言へないも

のもの)力と熱とから見離されつゝあるを眼のあたり見せつけらるゝ時私は云ひ難い疑惑に導かるゝ。

かの血を咯く様な猛練習、鈍牛の如き遅々たる苦役、過勞の後の合宿生活の單調と憂愁、かくの如き試練を越えて我々の先輩は尙且つ男の子の意氣地のために戦つた。闘争に於てのみ我々は力と躍進とを望み得る聲名を擲ち利害を謀り敢然として一片の意氣地をのみ闘つた先蹤の足跡に頼いて私は敬虔に襟を正す。

然しながら聖地は永久に見放されぬ、昨十一月委員會に於て琵琶湖遠征が可決されるや否や猛然立つて馳参じた十有數名の殉教者達は立派に先人の意圖を繼いでくれた、綠水の春ままだきクラツチの響は嘯々として水禽の夢を破つた。以下少しく練習のスケジュールを述べる事とする。

三月十日より五月廿日迄川尻砂屋旅館合宿の間十日間東大より平出忠美氏コーチとして來られ主にバック台について根本フォームをコーサス。氏は東都漕艇界の權